

# 「エコマネーどんぐり」がつなぐふるさと活動

瀬戸川フォーラム 代表 山田辰美氏

「エコマネーどんぐり」ですけれども、流通してなんぼの世界ですので、せいぜい使っていたきたいなというふうに思います。ここにどんぐりを並べて、いろいろ大小さまざまなタイプがありますけれども、いろんなエコマネーの中でも、こういう一個一個個性のあるエコマネーって、あんまりないかもしれませんので、そこがここの味だと思うんですけれども、先ほどエコマネーの考え方、説明を受けまして、実は僕たち、あまり「エコマネー」という言葉くらいを知っていたり、あるいはミヒヤエル・エンデのメッセージとか、そういうものは知ってたんですけれども、エコマネーとは本来どういうものなのかということを知らずに、5年ほど前からエコマネーを始めています。

最初からどんぐりでした。どんぐりも年々進化をして、ひところは完全に「トトロ」そっくりでしたけれども、胸のところに「へ」を幾つも並べるとトトロになるわけですが、そうするとジブリというところから金を取りに来るという話がありまして、それじゃ文句つけられない形にしようということで、進化しまして、ゴリラの顔になったり、いろんな形で、遊び心でいろいろにつくっています。幸い、最初からそういうネイチャークラフトのようなものを私たちやっていたものですから、そういうものを子供にあげたり大人にあげると、みんないい顔をしてくれるんですね。まゆが上がって、「わあー」って温かい気分になるものですから、そういう気持ちのやりとりに、これはいいぞと思ったわけですね。

「瀬戸川フォーラム」というイベントを毎年やっているんですが、そのときは岡部でやったんですね。焼津でやったり、瀬戸ノ谷でやったり、稲葉でやったり。瀬戸川流域の交流というのを目的に活動しているものですから、年に1遍大きなイベントをやるわけですね。そのときに、地元の人に、地元の物産を出してよと。有機栽培をやっている人たちを知ってるものですからね。その人たちの農作物とか、あるいは手づくりの梅干しだとか、らっきょうだとか、そういうものを出してくれるとうれしいなということでしたんですが、意外とお百姓さんたちはシビアでね。「幾つ売れるかわかんないし、残っちゃうと困る」というわけですね。「ある程度数を読んでお誘いできないかな」というのが、実を言うとそういう事情というのが最初のエコマネーのきっかけだったんですね。

我々は、毎回イベントごとに集まるメンバーを、多いときには400人。200人くらいはいつも集ま

ってくれてますから、ある程度読めるわけですね、数が。そのときに、お弁当はいつも交流のほうで準備しますよということで、いつも500円くらいいただいて地域のいろんなものを提供していただんですけども、そのときに、お買い物ごっこみたいな感じですけども、どんぐりを5つ与えて「好きなものを取ってください」ということで始めたのがエコマネーの始まりなんですね。

これが受けましてね。子供だけじゃないんですね。遠くから来た大人が喜んで、「どんぐりはどうやったら買えるんですか」って。いや、あれ会員制で、最初に参加費を出したときに5個渡すものなものであるから買えないんだけど、特別に、じゃ5個の単位で、500円くれると5個渡すということでやっていますので、そういう形で買っていただければお渡ししますと。直接金で買やいいのに、どんぐりで買ったがっていた大人が結構いたんですね。こういう物のやりとりといますか、そういうのが、面白みもあって、子供のごっこ遊びみたいな感覚で、いいのかなというふうに思います。

そのころも、瀬戸川フォーラムではいろんなボランティア活動をやっていましたけれども、そのときに配るように、翌年からなりました。「クローバークリーン」という、この辺の4つの小・中学校が、流域の一斉清掃というのをPTAで話し合っただけでやってくれたんです。残念ながら今は途切れちゃっているんですけども、その活動日を私たち知っていましたので、その日にどんぐりをいっぱいずつって、そこで清掃してる子供たちに、「ありがとうね」って、1個ずつ渡していったんですね。「何これ。うれしいけど何？」ということですね。「いや、今度ね、あそこの公民館でやるとき来てくれたら、これで手打ちそばが食べれたり、いろんなものがもらえるよ。来てね」ということで、チラシと一緒に配って歩いた。それがエコマネー的な活動の最初だったんですね。

きょうも、元井戸という井戸が勝草橋という橋の上と下にあるんですが、そこは、この藤枝、あるいは瀬戸川という地域になくってはならない水辺だったんですね。土手を頑固に、甲州流という、武田信玄なんかの系統を引くような土手のつくり方で、頑固な土手があるんですね。そのおかげで、藤枝の地区、あるいは田中城は大きな洪水に遭わなくなった。ところが、町を営むときには、水というのがなくてはならないんですね。生活水が。お洗濯をしたり、足をゆすぐ水、お風呂の水、水が欲しいんですね。土手で水が分流しなくなっちゃった分、どうやったら水が取れるだろうかということで、藤枝市民は結構知ってると思うんですけど、何カ所かにこういう掘り抜き井戸という、元祖井戸ですね。

井戸というのは、昔の技術ではそんなに深く掘れません。しかし、伏流水というのが、自由地下水というのが浅いところを通っていることはみんな知ってたんですね。瀬戸川でおままごとなんか、僕は小さいころよくやったんですけど、そのときに、お風呂をよく掘っていました。濁るんですけど、上流のほうから静かに、本当にゆっくりですけどもね。濁りがひいてくんです。ああ、伏流

水というのは、こんなにゆっくりな流れなんだなと。確かに、砂利の中では摩擦があるものですが、表面を流れている水はさらさら流れるんだけど、地下水はゆっくりなんですね。でも、そこを掘ってしまうと摩擦がなくなるもので、周辺の水がそこにダーンと湧き出して、一気に水位が上がるんですね。そこを源にしてる川が、この藤枝の地区を潤している川なんです。

その水源の1つがこの元井戸なんですね。近くに大きいのが2つありますけれども、この部屋の幅くらいある水源なんですけどね。ここが今、放置されて荒れちゃってるんですね。ある地区の藤枝まつりに使う山車の車輪。丸太でできているんですけど、それを沈めてある清らかな水辺なんですけれども、とんじゃくはないですね、今の人たちは。草ぼうぼうとしたり、あるいは石垣が崩れている。それを4年くらい前から、我々草刈りしたり、ちょうどそこが、お昼休みにコンビニ弁当食べるいい場所になって、ゴミの山になっているんですね。子供たち連れて行って、そこで遊ぶときいやなものですから、そこにゴミがあると。子供たちと一緒に草を刈ったり、ゴミを集めるということをやってきました。きょうはちょっと集まりが悪くて、20人くらいでしたかね。だから気前よく、きょうはどんぐりも、いつになく3個ずつ配ってしまいましたけどね。いつもけちけち1個か2個なんですけど、きょうは3個ずつ配ったので、リッチな気分で購入を楽しんでる子供たちがいたのはそういう理由なんですね。みんなでこういうことをやっている。

そういうときに、ごほうびで「ありがとね」って手渡すんですね。もらったほうも「ありがとう」と、にっこり笑ってくれる。そういうやりとりがそこで終わっちゃうんじゃないかと、次の集まりのところでそれが使えないだろうか。きょうは早速こういうイベントがありましたので、イベントに参加してくれた。それだけで我々、すごくありがたいんです。今は人がなかなか集まらないんですよ。えらい講師料払って、いろんな方をお呼びしたり、チラシで何万かけても、集まるのは10人とか、そういうこともときどきありますよね。我々の集まりは、いつもごほうびつきですね。「ああ、来てくれたね。ありがとう」と言って我々も迎えるし、参加した人も「ありがとう」と言って帰る。そういう雰囲気なんですね。その雰囲気のイメージキャラクターみたいなのが「どんぐり」なんですね。そういうフォーラムの会の参加を促す

(録音切れ)

そういうような役割もあるんですけど、我々はもう、意外と即効的な効果をねらってしまいました。

きれいな形では、美化とか清掃とか植林とか竹刈りなんていう活動を我々の仲間はやってますので、そういうのに参加した人たちに、地域貢献のお礼として「どんぐり」。どんぐりは種だし、それはやがて大きな木になるということで、イメージ的にもすごくいいんじゃないかなと思って、ど

んぐりを差し上げるわけですね。で、環境学習の場に参加した子供。総合学習で瀬戸川を学んでくれた子供なんかにも分けたことがあります。ほとんどが清掃というところで分けていることが多いんですが、さっき言ったように、会への参加を促すために使ったりしています。

最初は金券的に、農家の人に、「大丈夫、100個は売れるから100個持ってきて」と言うときの理由づけに、これだけのどんぐりを配るから、そこに市場があるから、ご参加くださいという形でやります。毎年イベントのたびに2,000個これをまいています。2,000個配るのもなかなか大変なんです。だから「うちのほうでこういうゴミ拾いやるから、もらっていいかね」「じゃ、50個差し上げますからまいてください」というようなことでやっています。でも、当然お金の裏づけがないと、さっきの話じゃないけどね。1個100円で瀬戸川フォーラムの事務局がお金と交換をします。個人的に「今3個もらったけど、300円のほうがいいで300円ちょうだい」というわけにはいかないですよ。パンを焼いて、あるいはクッキーを焼いてきてくれたり、農産物を持ってきてくれたような、イベントの盛り上げに協力してくれた人には、そうやって金券としてお金と交換するわけです。

さっき「揺らぎ」という言い方がありましたけど、その揺らぎを表現するために、きょう学生に手伝ってもらってカラーコピーしたりして200円くらいかかっている冊子を、2どんぐりで売っていますけれども、その作業とかいろいろ考えれば500円くらいで売ってもいいものだと思うんですよ。だから、お金で買ったら500円。どんぐりだったら2つでもらえちゃうと、お得感をすごく強調しているわけですね。バラの花も、最初は3つで1どんぐりにしようと思ったけれども、そうすると、お金にかえるとろくに残らないかなということで、ちょっとけちで2つにしてみましたけれども、実は100円以上のものなんですよ。150円まではいかなかったかもしれないけど、それくらいで買ってきたもの、農家から分けてもらったものを、そうやって提供するということですね。

つまり、きっちり100円で買っているものではないんです。だけど、多分あのクッキーとかパンも、常識的に言えば100円のものじゃないですよ。どう考えても、もっと高く売れる手づくりのいいものなので、出してる人は、金もうけをしようと思ったらわりが合わないかもしれないけども、でも農家の人なんか、結構喜んでくれるんですね。確実ににはけますので。我々事務局のメンバーなんか、どんぐり持ってるものですから、残っちゃうといけないなとか思ってやりますからね。幸い、ここ5年間、イベントの中で、ほとんど残らずに完売ですね。2,000まくといたら、最終的に20万円の原資がないといけないじゃないかと思うわけですね。一応予算は20万立てます。でも、いつも大体10万円。10万円だけお金と取りかえに来てくれますね。あとの10万円分の1,000個はどこへ行っちゃうのか。それはね、「うれしい。これ使いたくない。持って帰りたい」という人がいてくれるんですね。それで事務局は赤字にならずに順調にっているわけですね。

何ででしょうね。それ以外にも何かあるんですかね。どんぐりで、売った人がまたほかのを買いに行ったりして、流通が、2,000個ばらまいているのに、結構物が動くんですね。とりあえずお店屋さんごっこみたいな場所で使ってはいるんですけども、それ以外にも、例えば、きょうも来てくれている、うちの大学の学生たち。ネイチャーゲームとか、そういうゲームの指導者の資格を持っているんです。子供たちに参加させるときに、1どんぐりもらったりする。本人たちは、それで欲しいものを食べたりする。そういうふうに、どんぐりがいろんなところに回り始めるんですね。きょうも、「去年もらったどんぐり、あったから持ってきた」という男の子がいたり、次回の予告編にもなるし、瀬戸川フォーラムの企画に行くと何かいつもおいしいものがついてくるぞ。今度はなにがあるかなというような期待感にもなっているとといったような、金額でいったら安いもんじゃないですか。10万円で、イベントが多いときに400人をはるかに超えたような、カウントしただけで400人受付を通ったというような、そういう数のイベントがやれているんですね。だから、どんぐりの効果は大きいなど。

ただ、エコマネーは日常買いたいんですね。でも、僕たちは、今のところなかなか日常というレベルにいかないで、イベントの中で使っている。さっき酒井先生のお話の中で、そういうイベントで流通を促すような話があったので、ちょっとそれはいいのかなと思ったんですけどね。これで、どこかのお店で、いつもどんぐり置いておいてくれて、何かのごほうびにちょっとつけてくれたり、「いいよ、どんぐり持ってきたら売っていいよ」とかいうお店が2、3軒地域に出れば、かなりありがたみが増しますよね。まだそこまで残念ながらいってないんですけどね。僕の行く飲み屋で、「これで1品つけるとかって、やってくれない?」「1どんぐりじゃなあ」って、なかなかその壁が崩せずにいますけれどもね。そういう使い方をまずしているということです。

どんぐりつくるところは、学生と一緒に、しこしこ1週間くらいかけてつくるわけですね。イベントが近づくと、妻と徹夜をして目玉を入れたりしているわけですけど、まあ結構楽しくて、いやつは戻ってこないんですね。みんな持って帰っちゃうもんですからね。よくないどんぐりから流通が始まる。そこがちょっと問題ではあるんですけども。それから、あんまり長保ちしちゃうといけないんで。それはやっぱり手づくりなものですから、片目が取れたりね。両目取れると失効してしまうというようなね。ポッケであんまりいつまでも転がしていると価値がなくなってしまう、そういうものだよということで、エコマネーの考え方にうまいぐあいに乗っかってくれたかなというふうに思うんですね。

僕たちがそういう活動をしている基礎にある考え方は、ふるさとの自然が変だよとか、子供がちょっとおかしいなという、そういう問題意識から、私たちは集まってやり始めているんです。例え

ば、僕の主催している「瀬戸川里の楽校」という子供キャンプの中で、ある子供が、ヒラタクワガタを、土手の大きな柳の木の根っこで、「そんなにほじくったら、その木倒れちゃうから、あんまりほじくるなよ」というくらい必死でほじくって、その中からヒラタクワガタを見つけてきたんです。本人は「オオクワガタだ！」って言ってきたんですね。見つけた本人にとってはでかく見えるんでしょうね。でも、「この辺じゃ珍しいよね、ヒラタクワガタ。すごいね。どこにいた？」「あのね、あのね、あそこで！」「あわてなくていいよ。落ち着いて話しなよ」なんてね。本人はもう、「やったあ！」で、まゆがこんな吊り上がって喜んでるわけですね。

ところが、そこに冷や水を浴びせるようなガキがいるんですね。「それ、ヒラタクワガタだから500円かな」。そう言うんですね。そうすると、「え？500円か」とかって、さっきまでの感動がスッと冷めちゃうんです。お金という価値観の呪縛ですね。餌づけされているというか、学習されているというか。500円であるはずがないじゃないですか。自分でとって、どこにいるかという、体験つきですからね。思い出つきですから、どんなに安くても2,000円なんて、値段決めちゃいけませんけどね。（笑）何とか鑑定団みたいに、何か価値は絶対に、だれかがジャッジメントして、きちんとした価値があるというような、そういう前提にしたような番組もあるくらいで、みんな自分の喜びとか自分の価値というものに不安なんですね。金という価値で一本筋を通してもらいたいみたいな、そういう世の中なんですね。

大人がお金お金ということで、お金を拝んでしまうようなことをやっているものですから、真っ先にその価値観を子供がコピーしているんですね。それがもう残念でならないんですね。うちの死んだおじいちゃんなんかもそうでした。うちの息子のヒロシが、「おじいちゃん、疲れたら肩叩くよ」なんて肩叩くと、「うれしいな。気持ちがいいなあ」。そこまではいいんですけど、「ちょっとヒロシ待て」なんて、がま口に手を伸ばして、「ほれ」って50円渡すと、「ちえっ、50円か」なんてね。

だから、最初に孫がおじいちゃんをいたわった、その気持ちにお金でこたえようとしちゃうからいけないんですよ。50円だと、何かそういうことの評価が低いみたいな感じがしてしまって、息子もあんまりうれしくなくなっちゃったりして。下手ですよ。なあ、ヒロシがやってくると、どんな薬よりもいっとう元気になるわ。あしたもおじいちゃん、頑張るでな」なんて言うと、プライドというか、自己実現というか、「ヒロシのおかげで」というのが、人間にとってどんなにかいいプレゼント。何よりもものごほうびだということがわかってないんですね。

僕らは、こういう社会をつくってしまって、幾つもそういう勘違いをして、まっしぐらでお金や物の価値で走ってしまったものですから、そういう人間のつながりだとか、そういう価値観という

のが、社会の中でのものすごく低く評価されてしまってるんですね。そういう中で、エコマネーという運動とか、そういうアイテムは魅力があると思うんですね。違う価値に気づかせる。理屈抜きに温かい感じが伝わる。ネーミングや印刷や、いろんなもので、みんな工夫し合ってる。だから、せいぜい意を凝らして、アイデアを出してやるというのがいいと思うんですね。

堅く目的を言うと、我々瀬戸川フォーラムというのは、「流域」という考え方の重要性を、いち早く、もう何年経つでしょうか。8年目になったんですかね。活動していて、「流域なんてちっぽけな世界観を押しつけるのは今ふうじゃない。もっと地球規模で何か考えるべきだ」と言う人もいますけど、今の子供たちを見ると、そういうのは必要ないですね。ITとか情報化社会で、テレビやビデオや、やたら世界じゅうのことを知っているんですけども、自分の足元のこと、あるいは自分自身のこと、家族のことについて何も知らないみたいな世の中ですから。情報化時代の弊害だとか、あるいは消費社会というんですか、金で何でも買える。金で幸せが買えるような価値観を何とかしなきゃいけない。うちの母親なんかも、本当に最後に死ぬときには、シジミにちりめんを巻いて、鈴をつけて、チリンチリンという交通安全のお守りみたいなものを幾つも幾つもつくって公民館に届けたりという活動をしていて、最後にそれをつくりながらパタンで倒れて死んであの世に行ったという、本当に幸せな人なんですけれどもね。

そのおふくろも、この時代にまやかされてしまった。それはね、カタログショッピングというのにはまった。麻薬ですね、あれは。あれだけしっかり者の母親が、「今買うと安いらしい」とか、「あれがつく」とかね。要するに、情報がすごく過多に、ものすごくリアリティーのあるのがドサッと来るじゃないですか。「あ、3つ買うともっと安い」とか言って買うんですよ。でも封を開けないまま死んじゃいましたね、幾つか。（笑）だから、僕らはやっぱり、この時代の中で、しっかり価値観を持たないといけないと思うんですよ。そういう、本当に大切なものという、本当の豊かさということに気づかせる1つの切り札としてエコマネーを考えるということはどうなんでしょうね。いけるんじゃないですかね。皆さんに可能性を感じていただけたらいいと思うんですよ。

話がちょっとあれですけど、そういう流域ということに着目して、最初にご挨拶された原さんとか鈴木さんとかと一緒に、流域という考え方で、この社会の改善を考えられないかなって考えて、まあふるさとのユニットとしては小さ過ぎると言う人もいるかもしれない。でも、ちょうどこの志太地区では、合併は失敗してしまいましたが、そのときにみんなが考えたユニットも流域という考え方で、必然性があるんですね。災害という恐ろしいもの。これは流域という単位で大抵起こるんですね。それから命を支えてくれる水。それを与えてくれるのも、上流があって下流があってという関係なんですね。今、地産地消とか言って、流通で物の動きをはかるといいよなんていうと

きの1つのユニットとして、行政区とは違う、流域という、狭いかもしれないけど意味のあるくくりで、ふるさとという1つのユニットをつくってみよう。そういう試みで瀬戸川フォーラムというのをやっているわけですね。

川の自然も、年々衰退して、「魚が前よりかなり減っていますよ」って、だれもが言うんですよ。どれくらい減ったと思いますかって、僕はみんなに聞くんですけどね。それは10分の1減ったり3分の1減ったりとかじゃないんですよ。1,000分の1くらいに減っている。それくらいに言ってもオーバーじゃないくらいなんです。種類が減っただけじゃなくて、本当に昔は、「瀬干し」という禁止漁法があったんですけども、流れがあって、分流しているところの片方をせいでしまう。そうすると干上がって、夏だと、魚たちがあわてて、上流に行っても水がないの知らないから、水がなくなってくると、上流へ上流へみんなあわてて行くんですね。そして上で、「うげ」という竹で編んだかごを持って待っていると、そこにごそつとアユでも何でも入ったものなんですね。そして、一旦またせいだところを開いてまた水を出しますね。半日遊んでまたせぐんです。そうするとまたいっぱいとれるんです。

だから、川の中から生き物が湧くという。とってもとって、太陽の光をさんさんと浴びるきれいな清流があれば、生き物はそこですぐに再生産する。友釣りなんかで、いい清流で、大きい縄張りをつくっているアユを釣り上げると、2番目のやつがそこに入りますからね。1時間もすると、夏の盛期だとまた釣り上がったりとすると、そういうような感じですね。湧くという感じがあったんですが、今本当それが、じり貧な自然になってしまいました。残念ですけどね。

泳ぐにも、飛び込んだりターザンごっこするような、いい淵がなくなってしまって、川の持っている魅力か力というのは、いろんな意味で落ちてしまってるんですね。でも、そのことに気づいている人って、そういないんですよ。僕なんかは環境だとか自然というのをやってる人間なものから、それが残念でならないものですから、フォーラムの皆さんと一緒に、「僕はそういうことを発信したいと思うんだけど」ということでやってるわけです。

中には、お地蔵さんをずっと調べていて、いいお地蔵さんが村々にあって、いわれがあるんだけど、土木事務所が、そんな何カ所にもあると邪魔だでということで、村のお地蔵さんをみんな1カ所にまとめてるんですね。そのお地蔵さんは、そこにはないとだめなお地蔵さんなんです。意味があるんですけども、村の衆に聞いても、「いやあ、もういわれ忘れちゃって、知らんだよな。あの人が知ってるらよ」「だけど、もう寝たきりだで」なんてね。瀬戸谷の衆に聞いても、お地蔵さんの扱いもそんなふうですよ。お地蔵さんというものを川べりに建てた、昔の人の川に対する思いみたいなものを伝えられないんですよ、今。



だから、そういうことの価値を知っている人たちが今伝えないと、ふるさとと子供の関係、ふるさとと僕たちの暮らしの関係みたいなものが途切れちゃうんじゃないか。それって、僕はすごい不安なことなんです。子供たちを見ていて、大地に根っこを生やしていない。何か安定感がないんです。すぐにステンと転びそうな。世界のことはすごく知っているんだけど、世界が広がっているんじゃないかと、あいつらはただ世界が薄まっているだけという感じなんです。しっかり大地に足を踏んで立っているという感じがしない。1ミリくらい宙に浮いてるんじゃないかなと思えるような、そういう子供たちが多い社会になってしまいました。

そういう中で、確実に関係づけられる世界として、流域という1つのユニットを提案しようとして僕たちは活動しています。ですから、上流の人と、瀬戸川の河口で漁をしてる人と出会わせたり、藤枝市が川のゴミ拾いをやるときに、ゴミというものに、どうしたら子供たちが気づいてくれるかなということで、焼津の漁師さん。シラス網をやっている漁師さんをお呼びしたんです。その人がいいこと言うんですよ。「おやじからこの漁を教わったんだけど、おまえ、シラスはどこで生まれるか知ってるか」って聞いたんです。「そりゃ、海に決まってるじゃん」って言ったら、「ばか。違うだおめえ。シラスは瀬戸谷の奥の山で生まれるだぞ」「なんで?」「見てみろ。大雨が降って、ちっと濁った水が海に入ったときに、わっとシラスが沸くだよ。それで2、3日後にこの大きくなるだぞ」って教えてくれたというんです。いい話でしょう。

今、日本中で、「森は海の恋人」なんていうキャッチコピーもありますけれども、本当にこの地域にもそういうお話があるんですね。ところが、昔はそうやって、森の恵みが海にまで届く。そして、海の恵み、アユとかウナギは、川を遡上して上流のほうに恵みを届けてくれる。ズガニなんていうのも、アユと同じで、河口で、オスメス向かい合って抱き合って卵を海に放って、赤ちゃん時代は河口とか沿岸で過ごして、メガロパ幼生という、かわいらしい、ずんぐりむっくりした、5ミリくらいですかね。ズガニの赤ちゃんが河口でウワーツとはってきて、この辺のときには、もう真っ黒くて、ちょっと毛が生えたズガニになるんですよ。そうやって、上流でまるまる太ったズガニになって秋に下るわけです。そのときに拾うと、中にみそがあつてね。上海ガニとほとんど同じ仲間ですから、うまいですよ。そういう恵みが海からも来るわけです。海には森の恵みが行くわけですね。

ところが今は、流域で交換しているものは何かというと、上流からはゴミしか来ないというわけですね。その原田さんが、「ゴミをとるの大変でね。こんだけ売れるシラス、きれいにするためには、たまらんだで」って言うわけですね。そうすると、子供たちにも、なるほどなあ、ゴミを捨てたらだめだなあと。「ゴミの中には、こういうスポンジがよく入っているんだが、これ何かわかり

ますか」と言うわけですね。皆さんわかりますかね。白いスポンジが、よく網に入るんです。これはね、たばこのフィルターなんです。みんなどこかでポイ捨てしたのは、結局は側溝に入って、瀬戸川に入って、海に行くんですよ。そういうのを、そういう海辺の人と上流のほうで暮らしている我々がちょっと交流しただけで、いろんなことを教わることができるんですね。

そういう、ふるさと学習というか、先生から教わるのとは違う学びの世界がそこにあると思うんですね。そのときには、ゴミ拾いした子供たちには、ごほうびとして、瀬戸川フォーラムが、1キロでしたかね。シラスを買って、「みんな、川の恵みが海に届いた結果だというんだから、食べろ」と言って、みんなにゴミ拾いした後、それをプレゼントしたりしました。どんぐりだけじゃなくて、そういうようなものもプレゼントしてるんですけども、何かそういう、どんぐりだとかシラスを通して、流域というまとまりがわかるし、上流と下流という、流域間交流というのもあります。

それから、流域にいろんな団体があって、民話を読んでもくれるような会もあって、僕の書き下ろしの、採話した民話をイベントのときに読んでくれたりする活動団体の交流。それから、きょうも感じていただけるとうれしいんですけど、世代間交流。子供をいつも僕たちは巻き込みます。きょうはあまりいないんですけども、そういう世代間の交流。1つのキーワードはやっぱり「交流」だと思うんですね。交流を通して地域に根っこを張っていく。子供も市民社会ということに気づいていく。いい加減なことをやったら、「おまえ、何やってるだ」と大人に叱られるような経験に慣れていく。そういうのにさらしていくということが、子供の社会性というものを高めると思うんですね。今の若者なんか、社会性というよりは、社会力というか、社会を構成する、つくっていく力がないんですね。それは大人がそういうヒントを与えてないからだと思うんですね。そういう中では、エコマネーというのは、ささやかなツールなのかもしれない。アイテムなのかもしれないけれども、そういうものを通して世界が広がっていくとか、関係を持つことができるということで、すぐれているんじゃないかなと思うんです。

P T AとかJ Cとかロータリーとか、いろんなボランティア団体があって、「私らもね、瀬戸川についてこういうことやったんですよ」「いや知らん」って。瀬戸川フォーラムで知らないんですよ。「P T Aでも河川美化でこういうことをやりました」って、全然知らないんですよ。「なぜ一緒にやらないんですか」と。「何か大変だったら言ってください。そういうときだったら僕ら、はせ参じますよ」と。お互い助け合っていないと、会を回してるだけでヒイヒイ言ってる会がいっぱいじゃないですか。だから、あわせ技で、交流することでお互い力を持てたらいいじゃないですかね。心ある人はいっぱいいるのに、何か、そのうねりをつくるのが我々は下手なんですよ。だから、そういう下手くそな我々にとっては、1つのエコマネーをみんなで分かち合って、「こっちの

会でも使える、あっちの会でも使える」と。そういうのがいいんじゃないかなと思うんですね。三島では、お金をバックにしたのとそうじゃないのと2つできちゃったらしいんですけども、何か、同じようなので、幾つもの団体が相乗りして使えるような、そういう可能性のあるエコマネーというのも、ぜひやっていただけたらいいと思うんですけどね。

今まさにそういう相乗り方式というのが社会を変えるような気がしてならないんですね。当分我々は、イベントという形で、こういう折にしかエコマネーをアピールすることできない。日常的にはなかなか忙しくてできないだけけれども、そういう輪がだんだん広がっていくといいなと思います。瀬戸川フォーラムも、我々の会費だけじゃなくて、応援してくれる。1万円という単位で、それ以上はいただかないことにしてるんですけども、1万円で100どんぐりが買えるわけですね。

「100どんぐりを流域にまいてください」と言っていただけのわけです。どんぐり100個で何か買いたいという人はいないんですよ。子供たちに100個あげてくださいとか、そういう人たちが我々のフォーラムに10人以上いて、そのおかげで毎年イベントができていたような状況があります。

行政も我々のイベントに協力してくれて、チラシの印刷とかという名目で寄附してくれたり、それはできるだけ、あんまり大きな声では言えないけど、印刷費を安く上げて、どんぐりをばらまくのに使わせてもらったりしているわけですけどね。担当のお役人はよく承知しているのでいいと思うんですけども。そんなような知恵で、行政も巻き込みながら、2,000どんぐり。実際には1,000どんぐり分のお金を準備すればイベントとしてできるわけですから。10万円でかなり大きなイベントができますのでね。ぜひ仲間に入っていただいて、どんぐり一生懸命つくって差し上げますから。

さっき「最初のどんぐりがエコマネー」なんていう話がありましたけれども、いいことをやってくれば、そこにどんぐりが生じると。もうバンバン配りますので。「イベントをやりたいから100どんぐり提供してくれ」と言ってくれたら100どんぐり持って来ますので。しかしそれは、我々のイベントに参加しないとごほうびにならないという仕組みなんです。我々にとってもメリットがあるので、持ちつ持たれつという形で、ぜひエコマネーの輪を広げていただきたいなと思います。参考になったらありがたいと思います。

とりあえず、どんぐりの輪を広げて、この近くにいる人はどんぐり使ってください。よろしくお願いします。